



大妻多摩中学校

二〇二二（令和3）年度

入学試験問題（第三回）

【国語】

時間 50分

2月4日（木）

【注意事項】

- 1 問題は22ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

注¹ この感染症が流行^{はやり}り出したとき、私は同じくウイルス性感染症である豚コレラや鳥インフルエンザの感染予防のために殺されてきた豚や鶏たちのことを考えた。人間の命がかれらの命よりはるかに①位置づけをされていることに改めて②したのである。

豚や鶏たちは、食肉として殺されることを運命づけられ育てられる。でも感染症がはやれば、本当に感染しているかは関係なく殺される。生きる目的を一方的に決められ生を受け、その目的を果たせなくなったら今度はあっさり殺されるのである。

でも、豚や鶏たちを育てている人たち、殺処分を実施した人たちを除けば、誰もそんな事実を目を向けることはない。○万頭の豚が殺処分になりました、とニュースに流れれば、「あ、そうなのか。かわいそうに」と幾^{いく}ばくかの哀れみの目を向け、そこから目を逸^そらす。いや、向けたくないのだろう。自分たちの残酷さをないことにするために。

でももし③同じことを人間に対してやったら、大変なことになるだろう。

(中略)

私は当然ながら今のコロナウイルスに対して豚と鶏と同じような対応をすればいいと考えているわけではない。④でも思うのである。今私たちは何を最も大切にしようとしているのかと。

⑤人命？ 本当にそうだろうか。このまま自^じ粛^{しゅく}と緩^{ゆる}和^わを繰り返せば、多くの人々の生活が崩^{ほう}壊^{かい}するだろう。もちろんうまく適^{てき}応^{おう}できてる人もいるだろうが、そうなれない人も必ず存在する。そのなかには生活に困^{こん}窮^{きゆう}して心身を病^びむ^む人、そのまま自殺する人もいるはずである。そしてその人たちは、このコロナの自^じ粛^{しゅく}がなければ間違^{まちが}いなくそうならず^{ならず}に済^すんだ人たちなのだ。

そういう人たちの命はとりあえず先送りにし、感染拡大防止だけを目的にすれば人命が守られるのだろうか。

私は思うのである。感染症が発生した地域で鶏や豚が無差別に殺されていく事実を目を背^{そむ}けながら、でも、肉としてのかれらは食

べたいと私たちが欲望するように、^⑥ 私たちは何かから目を背けるためにこんな社会を作り出しているのではないのかと。

私たちが目を背けたいこと。それは私たちが科学の力で作り上げた社会が、安心・安全ではなかった事実なのではないだろうか。足りているはずだった機材が足りなくなり、ウイルスの行先は管理ができず、治療薬も見つからない。ついにはそれで死んでしまう人まで出るようになった。

その敗北から私たちは目を背け、^{注2} ロックダウンさえすればコントロールができるのだと、^⑦ それに伴う痛みは補償を出せば乗り切れるのだと信じ込むことよって、システムの敗北から必死に目を逸らそうとしているのではなからうか。

不要不急の先で私たちが守ろうとしているものは、人命第一という薄っぺらな^{注3} モラルに包まれた科学と人間の^{注4} インテリジェンスへの狂信^{きやうしん}に私は見えてしまう。

新型コロナウイルス対策専門家会議のメンバーである押谷仁^{おしたにひとし}氏は次のように語っている。

僕らの大きなチャレンジはいかにして社会経済活動を維持したまま、この流行を収束^{しゆふく}の方向に向かわせていくかということ。都市の封鎖^{ふうさ}、再開、また流行が起きて都市の封鎖^{ふうさ}ということを繰り返していくと、もう世界中が、経済も社会も破綻^{はたん}します。人の心も確実に破綻^{はたん}します。若者はもう将来に希望を持ってなくなる。次々に若者が懂^{あてが}れていたような企業はつぶれます。倒産していきま。中高年の人たちは安らぐ憩^{しじ}いの場が長期間に渡って失われます。

その先に何があるのか、その先は闇^{やみ}の中しかないわけです。その状態を作っちゃいけない。

(『NHKスペシャル 新型コロナウイルス 瀬戸際の攻防・感染拡大防止・最前線からのお知らせ』4月10日(金) 放映)

押谷氏は番組のなかで、緊急事態宣言の間に感染者の急上昇^{おとせ}を抑えられれば、ウイルスへの対策をそれ以前に行っていたクラスターをつぶす対策に戻し、以前に近い形で社会生活が行えるようになる可能性がある」と述べている。彼はワクチンを待つべきだと

は言っていない。

私たちに今必要なものは、わかりやすく、攻撃的な指示ではない。非常事態時において確かにそのような指示は私たちに安心を与える。しかしその安心は、他者の指示に自分の人生を合わせるといふ、思考停止によりなされたものだ。対策班の中心人物である押谷氏が、決してそのような言葉で人々を^{注5}先導^{せんどう}しないことが私には希望にみえる。なぜなら彼は私たちに思考停止を求めておらず、ウイルスと付き合いながら、社会を続ける方法を考えることを求めているからである。

私たちにとって必要火急なのは人工呼吸器でも、集中治療室でもない。ウイルスの恐怖の前に吸い取られつつある、自ら考える力と他者への信頼こそが必要火急である。ありきたりの言葉であるが、このありきたりがこれほどまでにあっさり^と失われることを私たちは今、目にしているのではないだろうか。

(2020年4月12日記)

(磯野真穂『不要不急とは何か』(農文協ブックレット21『新型コロナウイルス19氏の意見 われわれはどこにいて、どこへ向かうのか』所収)より)

注1 この感染症——新型コロナウイルス感染症。

注2 ロックダウン——感染症拡大防止などのために、都市部において、人々の外出や移動を制限すること。

注3 モラル——道徳。

注4 インテリジェンス——知性。

注5 先導——先に立って導くこと。

問1 次の選択肢は空欄①②に当てはまる言葉です。組み合わせとして最も適切なものを次のア～エの選択肢の中から一つ選び、そ

の記号を答えなさい。ただし、かつこ内は②の言葉の意味をヒントとしてあげているものです。

- ア ① 高い ② 狂喜きやうき（意味 激しく喜ぶこと）
イ ① 尊い ② 驚愕きょうがく（意味 非常におどろくこと）
ウ ① 低い ② 悲嘆ひたん（意味 悲しみにくれること）
エ ① 清い ② 苦惱くのう（意味 苦しみなやむこと）

問2 ——線部③「同じこと」とはどのようなことですか。五〇字以内で説明しなさい。

問3 ——線部④「でも思うのである。今私たちは何を最も大切にしようとしているのか」とあるが、(1)ここで使われている表現

技法と、(2)その効果について最も適切なものを、それぞれア～エの選択肢の中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

(1) 表現技法

- ア 体言止め イ 倒置
ウ 対句 エ 反復

(2) 効果

- ア 「私たちは何を最も大切にしようとしているのか」という筆者の疑問を強調し、読者に印象付ける効果。
イ 「でも思うのである」という筆者の素直な気持ちを読者に自然に受け止めさせるような効果。
ウ 「でも思うのである」というように、世間一般とは異なる筆者の思いを読者に改めて認識させるような効果。
エ 「私たちは何を最も大切にしようとしているのか」という疑問を読者自身に問いかけさせるような効果。

問4 — 線部⑤「人命？ 本当にそうだろうか」とあるが、このように筆者が述べるのはなぜか。その理由として最も適切なものを次のア～エの選択肢の中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 自粛生活を続け、感染防止策をいくら徹底しても、完全には防止することができず、必ず犠牲者が出るので、結果的には人命は軽んじられているのが現実だから。

イ 自粛生活で人の命を守るよりも、緩和をして経済を重視する政策を優先させることは、何よりも経済が大切だと考える人間社会のあり方を明確に示しているから。

ウ 自粛生活を続けることによって、家の中に引きこもった多くの人が気持ちの拠り所を失い、自分の命を大切に思う気持ちを見失ってしまったから。

エ 自粛生活を強いられることで命を失う危機に立つ人々については何ら対策はなく、人命は軽んじられているのが現実だから。

問5 — 線部⑥「私たちは何かから目を背けるためにこんな社会を作り出しているのではないかと」とありますが、「何か」とはどのようなことですか。「～ということ」につながるように本文中よりその答えを三十字以内で抜き出しなさい。

問6 — 線部⑦「それ」とは何を指していますか。本文中より抜き出して答えなさい。

問7 本文において筆者が「押谷氏」の発言を取り上げたのはなぜですか。答えとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア コロナウイルスのワクチンの完成を各国が競っている中、ワクチンを待つ間にいかにウイルスを拡散させないかが大切だという筆者の意見とワクチン不要と考える押谷氏の意見は対立しているから。

イ 緊急事態においてはリーダーのわかりやすい強い指示が人々の不安を消すには何よりも大切だ、という筆者の意見と押谷氏の態度は共通するものがあるから。

ウ コロナウイルス感染拡大が続ける中で、誰かの指示を待っているのではなく、ウイルスと付き合いながら日常生活をどのように送ればよいのかを考えることが必要だ、という筆者の意見と押谷氏の意見とが共通しているから。

エ 強いリーダーの元で考える力をなくしてしまった人々をウイルスに立ち向かわせるために何が必要なのか、という疑問を押谷氏のインタビューを通じて筆者は持ったから。

問8 本文において、コロナウイルスが身近にある状態では社会生活をおくるためには、私たちにとってどのようなことが一番必要だと主張していますか。押谷氏のインタビュー後の本文から十三字で抜き出して答えなさい。

問9 コロナウイルス感染拡大防止のため、日本では昨年二月末から自粛期間が始まり、それに伴い学校も休校になりました。様々な我慢を強いられた自粛期間を通して、あなたが一番大切だと思ったことはどのようなことですか。その理由も含めて百字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

調理師を目指し故郷の茨城を出て十年、調理師学校に入学後、料理コンクールで数々の賞を取ってきた佐々目宗は生活のために仕方がなく小学校の調理員として勤務を始める。自分の調理師としての技術が給食ではなかなか評価されず、自信を失いつつある中、同僚の毛利とともに「子どもたちの野菜嫌いとの戦い」を始める。

「みんなが、今いちばん食べたいものは何ですか？」

子どもたちは互いの顔を見た。そして叫んだ。

「何でも食べるー！」

「あ？」

食べる、食べると声が続く。

教壇の横で控えていた、新委員長長の六年生、永沢舞香が「はい」と手を上げた。棒のような体に真っすぐな長い髪、前髪も口元も同じくらい真っすぐに引き結んでいる。直線だけでできているような女の子だ。

「給食は私たちの体のことを考えて作られているので、何でも残さず食べるべきです」

予想もしなかった正論をぶつけられて戸惑ったが食い下がった。

「でもさ、これが食べたい、ってものはあるでしょ？」

新副委員長の六年生、堀内光貴が大げさにプツと噴き出してみせた。ウェーブの掛かった髪をあご辺りまで伸ばし、やたらに体を揺するヒップホップ系の男の子だ。

「食べものの好き嫌いとかガキみてーなこと言ってるんじゃないし？」

他の子どもたちからも声が上がる。

「何でも食べられるってカッコいいじゃん」

「ウチら給食委員会だし」

ささめさん、と幼いウイスパーパーボイスが隣で響いた。書記に選ばれた五年生の榎本^{えのもと}仁奈^{にな}が隣の席から体を寄せている。体は年相応に小さいが、目鼻立ちのはつきりした美人顔で、大胆な花柄のミニワンピースを着こなしている。青山^{あきやま}辺りにいる二十代半ばの女を、縮めて小さくしたような女の子だ。

「あたしはー、ささめさんが作ったものだったら何でも食べるよ？」

仁奈は微笑んで腰の辺りまである長い髪をかき上げた。

①「……じゃあみんな、どんな給食でも食べたいんだ？」

最後の抵抗に子どもたちに聞くと、全員が「はい！」と声を揃^{そろ}えて叫んだ。入れ違いに、毛利が感激^{おどろ}の面持ちで前に走り出て叫んだ。

「ありがとう、みんな！ 給食はいつも、みんなの味方だからね！」

からかわれているような気分で席に戻ると、隣の深津先生が小声で言った。

「あれがヒント」

「はいっ」

「『食べるべき』『カッコいい』『大人ぶりたい』『ささめさんが好き』。子どもは頭じゃなくて心で食べる。たとえ嫌いなものでも、何か心をつかむものがあれば食べてくれるよ。スパイスが香りや色で食欲をそそるみたいだね」

——スパイス。

夜、自分の部屋で白ワインで晩酌^{ばんしゃく}をしながら、佐々目は改めて考えた。

スーパード安くなっていたタラの芽を使ってフリットを揚げるついでに、思いついて久しぶりにゴボウチップスも揚げたのだ。今

日はマヨネーズの代わりにアイオリソースをつけている。亡き祖母との思い出が蘇る。

子どもの頃、ゴボウが嫌いだった佐々目に、祖母はゴボウチップスを作ってくれた。ゴボウを斜め薄切りにして片栗粉をまぶし、からりと揚げてマヨネーズをつけて食べるのだ。

② 大人の味だからねえ。宗ちゃんにはまだムリかもしれないね。

祖母は子どもの扱いが上手かったと思う。まだムリだと言われてムキになり「食べれる！」とゴボウチップスを口に入れた。揚げたてのチップスはパリッと香ばしく、衣の片栗粉に少し混ぜたガーリックパウダーのおかげで、泥臭い匂いも気にならなかった。そしてそのとき、初めてゴボウが食べられたのだ。自分が大人になったようで嬉しかったのを覚えている。

あのととき、祖母はゴボウを食べさせるために、味の工夫の他に、心をつかむスパイスも添えてくれたのだと気づいた。「大人の味」というスパイスを。

子どもの食に必要な「スパイス」の正体がようやく見えてきた。派手な仕掛けや凝った作りではない。ほんの小さな気持ちだ。これからするべきことがようやく見えてきた。

(中略)

五、六年生のフロアにワゴンを運んでいくと、授業終了のチャイムとともに子どもたちが飛び出してきた。くじびきハンバーグだ、という声も聞こえてくる。給食委員会が行った告知は、かなりの効果で浸透しているようだ。

いつものクラシックと違う、サンバのリズムも流れてきた。「くじびき」のルールを説明するために、給食委員会の子どもたち総出演で作った告知ビデオが、各教室に置かれたモニターから校内放送で流れているのだ。

「こんにちは、給食委員会です！」

ニンジン、タケノコ、レンコン、ナス、さまざまな野菜のコスプレをした子どもたちが勢揃いして画面に手を振る。

「今日のハンバーグは特別です！ 名付けて、く・じ・び・きハンバーグ！」

「では、くじびきのルールを説明します！ ハンバーグの中に、野菜が入っています。それはラッキーアイテムです。どれが当たる

かな？」

ゴボウのコスプレをした舞香が、棒立ちで真面目に語る。

「ゴボウのお花は、勉強がはかどる勉強運！」

タケノコのコスプレをした光貴が踊る。

「タケノコの星は、いいことが起きるラッキースター！ イエー！」

ニンジンのコスプレをした仁奈が、手でハート型をかたどってウインクする。

「ニンジンのハートは、好きな人と仲良くなれるラブラブ運！」

給食委員会の全員が叫ぶ。

「みんな、食べてね！」

(中略)

保健室には、教室になかなか入れない佑磨ゆまがいた。佑磨を元気づけようと、宗は佑磨ゆまがくれたヒントを元にくじびきハンバーグを作ったのだった。

保健室で、佑磨も由比先生と校内放送を見ていた。机はすでに片付けられ、トレイが来るのを待っている。さっそくトレイを置いて皿のラップを取った。

「ジャン」

いつの間にか照れずに言えるようになった。

「くじびきハンバーグだ！」

佑磨が声を上げた。由比先生が笑って言葉を添えた。

「そう。佑磨くんのおかげでできた、くじびきハンバーグだよ。今、学校中のみんなが、佑磨くんのくじびきハンバーグを食べてるんだよ」

佑磨が「ぼくの」と笑う。自分が役に立ったことが、本当に嬉しいらしい。

「くじ、どれが当たったか見せてよ」

頼むと、佑磨は危なっかしい手つきで、先割れスプーンでハンバーグを割ってくれた。

ほしだ、と佑磨が小さく声を上げた。出てきたのはタケノコの星だった。実は、これは仕込みだ。絶対にラッキー運のハンバーグを届けようと、目印をつけて取り分けたのだ。

佑磨は少し戸惑ったようにタケノコの星を見ている。前にタケノコでサイコロを作ったときは、一口も食べてもらえなかった。ちよっどもモニターの画面に出てきたタケノコを示して言った。

「ほら、ラッキースターだ。願いごとが叶うよ」

「ほんとに？」

「ほんと」

「佑磨くんは給食のおにいさんにヒントをあげた子だから、一番パワーがもらえるよ」
由比先生が絶妙なフォローを入れる。それを受けて付け加えた。

「これで誰にも負けない、強い子になれるから」

子ども騙し^{だま}でも何でもいい。失っていた自信と勇気を取り戻してほしい。

佑磨は何秒か、ためらうように星を見つめた。

そして、エイッと口に入れた。噛んで、飲み込んだ。

「食べれた！」

佑磨が声を上げた。手のひらを向けると、小さな手のひらがパチッと音を立てて打ち付けられた。^④その背中は、まっすぐに伸び

ている。

「佑磨くん、きつともうすぐ、教室に戻れると思う」

由比先生が囁いて微笑んだ。

——こんな風に。

全校の子どもたちも、くじびきハンバーグを楽しんでくれていたらと思う。

こんなにも食べる人の気持ちを考えたことはなかった。味が良ければいいと思っていた。

保健室を出て、他の子どもたちの様子も見ようと教室棟に向かった。

まずは一階にある保健室から地続きの、一、二年生の教室のあるフロアに向かう。一番手前の一年二組の教室から、ふいに男の子の凄まじい悲鳴が聞こえた。何ごとかと駆けつけ、教室を覗き込んで立ちすくんだ。

男の子たちがつかみ合いになっている。

「おれの花とおまえの星とつかえろよ！」

「やだっつってんだろ！」

女の子が「やーだー！」と泣いている。

「ミホはハートがいい！ ハートがいいの！」

⑤ 他の子どもたちも大騒ぎだ。担任らしき大人しそうな若い女性教師が「みんな、ケンカはダメ」と必死で子どもたちをなだめている。

廊下を見渡すと、他の教室からも騒ぐ声が聞こえてくる。

そうきたか、と脱力した。食べてもらえるかどうか、ばかり気にしていて、「くじ」がケンカや不満の種になるうとは

⑥ にも

思わなかった。くじびきのシステムを理解できるのは、ある程度の年齢になってからだ。幼い子どもにとっては好き嫌いが先だ。

入っていったって何か言わなければ、と思うが何を言えいいのかまるで思いつかない。引き戸をつかんで立ち尽くしていると、後ろから何かが押し退けるように横を通った。

「みんなー、静かに」

聞き慣れた声に驚いた。子どもたちが ⑦ を打ったように静まり返った。

鳴り出したサンバに合わせて、ナスが踊っている。見覚えがある、段ボールで作ったパネルだ。裏には小型スピーカーとiPodが仕込まれている。紫色の身から、レギンスと長袖Tシャツを着た黒い手足が伸びている。ヘタの下にくりぬかれた穴から、毛利の顔が覗いている。

どれだけ練習を重ねたのか、毛利のステップは軽やかで鮮やかだ。子どもたちばかりか女性教師までも、ぼかんとナスを見つめている。

ひとしきり踊った毛利ナスは、腰に手を当てて子どもたちを見回した。

「みんな、くじびきハンバーグ、食べてる？」

「はいー！」

子どもたちがナスを見る目は、もはやあがめる目だ。キャラクターものに人気がある理由が分かった気がした。

「くじびきの『くじ』は食べた？」

ナスが尋ねると、子どもたちの間から「やだー」という声が響いた。

「やだ、って言った人は、どうして？」

「おれ星がいい」

「ミホはハート」

他にも何人かが、勝手な希望を述べ立てた。

「どうして星やハートがいいの？」

「かっこいいもん」

「かわいいもん」

毛利ナスは、子どもたちをゆっくりと見回して言った。

「みんな、くじってというのは、神様がくれるいいことへの入り口なんだよ。欲しいものとは全然違うように見えても、実はちゃんと繋が^{つな}がってる。星がほし^ほいって言った君は、ニンジンのお花を食べてお勉強を頑張れば、すぐかっこいい星が手に入る。ハートが欲しいって言った君は、ラッキーなタケノコの星を食べてお祈りすれば、可愛いハートが手に入るよ。他のみんなもおんなじだよ」

子ども相手に理論武装かよ、と呆^{あき}れた。

しかし、子どもたちの間からは「そうなんだ」と声が上がった。ナスの力強い言葉に心揺^ゆさぶられたのか、それ以前にナスに魅^{みりよう}了された勢いか、子どもたちの何人かが「くじ」を口に入れた。

星がいい、と言った男の子は、花型のゴボウを口に入れた。ハートがいい、と言った女の子も、星型のタケノコを口に入れた。

毛利は教室を見回し、「くじ」を食べる子どもたちを満足そうに見た。そのときだけは目が鋭かったのを、佐々目は見逃さなかった。

「それじゃ、またねー！」

再び流れ出したサンバに合わせて踊りながら教室を出ていくナスを、子どもたちが歓声を上げて見送った。慌ててナスを追った。

廊下に出た毛利は、ステップを止めてくるりとこちらに振り返った。

「佐々目さん、来てたんですね」

「……毛利さん、踊ったりするんですね」

何と言っているかわからず、とりあえず口にした言葉に、毛利は笑顔で答えた。

「僕、給食のためなら何でもしますから」

「……なんでナスなんですか？」

「目の前にニンジンやゴボウやタケノコがいたら、食べづらいでしょ？ 子どもって繊細ですから」

毛利はパネルの中に手を突っ込んでごそごそやり、紙とペンを取り出すと小さい字で何かを書き込んだ。十二クラス分の表に、すでに三分の二近く書き込みがある。

「くじびきハンバーグ、おおむね評判がいいです。特に、中学年と高学年は面白がつて食べてます。この分では結果は期待通りになりそうですよ」

「でも、今みたいなケンカとか」

信じられず聞き返すと、毛利は答えた。

「それだけ、子どもたちが夢中になってるってことですよ。奪い合うくらい」

毛利は手にした紙とペンを腹の辺りにしまった。

「子どもたちに野菜を食べさせる方法には、まだまだ工夫の余地があるってことですな」

毛利は「それじゃ」とiPodのスイッチを入れると、サンバに合わせて踊りながら、次の一年一組の教室に入ってしまった。子どもたちの歓声が響いてくる。

⑧ ナスに助けられた。

毛利も毛利なりに、くじびきハンバーグの「スパイス」を考えてくれていたのだ。

廊下を進んで一年一組を通り過ぎ、二年二組の教室のドアガラスから中を覗き込むと、子どもたちと給食を食べていた深津先生が振り返り、こちらに向けて親指を立てた。笑顔を返してドアを離れた。

これまでの自分に足りなかったもの。高い技術を、費やした努力を、認めてもらうことだけに必死で見えなくなっていたものが、今なら見える。

——くじつていうのは、神様がくれるいいことへの入り口なんだよ。欲しいものとは全然違うように見えても、実はちゃんと繋がってる。

⑨ 若竹小の給食調理場も、実は今の自分にとって、神様がくれたくじなのではないか。そんなことを思いながら、佐々目は踊りな

がら廊下に出てきたナスを振り返った。

(遠藤彩見『給食のおにいさん』〔幻冬舎文庫〕より)

問 1

——線部①『……じゃあみんな、どんな給食でも食べたいんだ？』最後の抵抗に子どもたちに聞くと、全員が『はい！』と声を揃えて叫んだ」とありますが、このような子どもたちの給食に対する考えを、佐々目をはじめとする大人たちはどのようにとらえましたか。その答えとなる最も適切な一文を本文中より二十字以内で抜き出し、最初の五字で答えなさい。

問 2

——線部②『大人の味だからねえ。宗ちゃんにはまだムリかもしれないね』とあるが、祖母はなぜこのようなことを言ったのですか。答えとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「大人としてふるまいたい」と考える宗の気持ちを否定し、宗が好まないゴボウを食べさせようと考えたから。
- イ 「大人になりたい」と考える宗の気持ちを汲み取り、宗のゴボウ嫌いをそのまま受け入れようと考えたから。
- ウ 「大人として認められたい」と考える宗の気持ちを刺激して、宗が嫌いなゴボウを食べさせようと考えたから。
- エ 「大人に誉められたい」と考える宗の気持ちに寄り添い、宗の行動をすべて誉めてやろうと考えたから。

問3 ——線部③「口の中のゴボウを飲み込み、冷たい白ワインで口の中をきりつと引き締めた」とありますが、この時の佐々目の

気持ちとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 子どもたちに給食をおいしく食べてもらうために何が必要なのか分かり、気を引き締めて取り掛かろうとしている気持ち。
イ 子どもたちの給食への要望をかなえてやろうとするが、具体的に何をしたら良いのかはつきりとはわからず戸惑っている気持ち。

ウ 子どもたちの給食への不満がわかり、何とかして自分一人で解決しようと決意したが、解決の道のりの険しさに絶望している気持ち。

エ 子どもたちの給食への期待度がわかり、その期待に応えるために自分の持つているすべての技術を使おうと燃えたぎる気持ちを抑えられない気持ち。

問4 ——線部④「その背中は、まっすぐに伸びている」とありますが、佐磨のこの姿勢は佐磨が何を取り戻したことを表している

と考えられますか。本文中より五字以内で抜き出して答えなさい。

問5 ——線部⑤「他の子どもたちも大騒ぎだ」とありますが、子どもたちはなぜ大騒ぎをしているのでしょうか。その理由として

最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 自分のハンバーグに入っていた星型やハート型をなるべくたくさん集めて自慢したかったから。

イ 今日の給食のハンバーグの中にあるタケノコやナスなどの食材が口に合わないことが分かっていたから。

ウ くじびきハンバーグをきっかけとして、これまでの給食に対する不満がいくつかの言葉に表れてしまったから。

エ くじびきのシステムがわからないため、星やハートなどの形に対する好きか嫌いかという気持ちが出てしまったから。

問6 空欄⑥⑦に入る一語として最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

ア 山 イ 海 ウ 水 エ 夢 オ 光

問7 線部⑧「ナスに助けられた」とありますが、この時の佐々目の気持ちとして最も適切なものを次のア～エの中から一つを選び、その記号を答えなさい。

ア 子どもたちが嫌いな野菜を喜んで食べてもらうためのくじびきハンバーグが、予想外のトラブルを巻き起こしてしまったが、その状況をナスのコスプレで救ってくれた毛利に感謝する気持ち。

イ 子どもたちが嫌いな給食を楽しく食べられることを期待して作ったくじびきハンバーグは、ナスのコスプレをした毛利に助けってもらわなくても良い結果が得られたはずだったのに、と毛利の手助けをうとましく思う気持ち。

ウ 子どもたちが大好きな給食をより楽しんでもらうための企画が、ナスのコスプレをした毛利のさりげない心遣いによってさらに盛り上がったことで、毛利への反発が消え、毛利の給食への愛に共感する気持ち。

エ 子どもたちが大好きな給食をもっと好きになってもらうための企画がナスのコスプレをした毛利の手助けによってやっと成果を得られたことを実感し、自分のふがいなさを感じ落ち込む気持ち。

問8 線部⑨「若竹小の給食調理場」とは佐々目にとってどのような場所であったのでしょうか。答えとして適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 全員で同じ給食を食べる、と言う小学校での給食経験が大人になってからの食生活に影響することを教えてくれた場所。

イ 給食作りという未経験な分野ではあったが、結果的に自分に必要なものが何なのかを気づかせてくれた場所。

ウ 子どもにとって「食べる」ということは、身体だけではなく人格を磨く^{みが}ためにも必要だということを教えてくれた場所。

エ 給食調理場は子どもたちが大好きな給食を作る場所だから、学校の中心にあるべきだ、ということに気づかせてくれた場所。

問9 本文の要約として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア レストランと比べて給食の調理場を軽んじていた佐々目が、学校給食を通して教師も子どもも成長していくことに気が付き、給食調理員という仕事の重要性を認識し成長していく。

イ 生活のために仕方がなく給食調理員になった佐々目が、給食に必要なのは味と栄養だけではなく、自ら食べたいと思う気持ちを引き出す仕掛けだ、という、給食だけでなく料理全般に通ずる調理の奥深さに気が付き、成長していく。

ウ 子ども達が嫌いなものを無理矢理食べることが必要な給食なんて意味がない、と感じていた給食調理員の佐々目が、嫌いなものでも食べ続ければ好きになることがあることを知り、そのきっかけとなる給食に対して愛着がわいていく。

エ 給食なんて作る価値もないと信じて疑わなかった給食調理員の佐々目が、日々の給食を通して子どもたちとの絆きずなが深まることに喜びを感じ、栄養士の毛利に反発しながらも一緒に新しいメニュー作成に取り組もうとする意欲に満ちていく。

問10 「給食」は日本だけでなく世界的に見ても、単なる「お

昼ご飯」だけではない重要な役割を担っていると考えられます。次にあげる「SDGs」の十七のゴールの中で

「給食」はどのゴールを達成するために有効な手段と言えるでしょうか。次の「SDGs」の図から達成できるゴールを選び、その理由とともに五十字以内で説明しなさい。解答用紙には選んだゴールの番号を記入すること。

「SDGs」とは、二〇一五年国連サミットで採択された二〇三〇年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際的な目標です。十七の目標があり、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓っています。SDGsは発展途上国だけでなく、先進国も取り組むべき目標であり、日本としても積極的に取り組んでいます。

(外務省HPより作成)

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



出典：国際連合広報センター HP より作成

三

次の各問いに答えなさい。

(1) 次の読み方の漢字をそれぞれの空欄に入れ、熟語を作りなさい。

(ア) トウ

- ① 朝八時に 校する。
- ② クラス全員で 論する。
- ③ 関 に大雨が降る。
- ④ 選をみんなで祝う。
- ⑤ 一地方選挙。

(イ) カイ

- ① 雲一つない 晴。
- ② 外へ脱出する。
- ③ 発をあきらめない。
- ④ スポーツジムに退 を申し出る。
- ⑤ 善する余地がある。

(2) 次の――線部の読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 税金を納める
- ② 風邪をひいて悪寒がする。

- ③ 安心して号泣してしまった。
- ④ 常夏の国に行きたい。
- ⑤ 外科医になりたいと考えています。

以下余白

